

比較家族史学会
会報 比較家族史 64

事務局 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7 弘文堂気付

学会事務連絡先 大学生協学会支援センター内 比較家族史学会

〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22 TEL. 03-5307-1175 FAX. 03-5307-1196

E-Mail: hikakukazokushi@univcoop.or.jp 郵便振替 00130-4-25222

2015年 比較家族史学会 第57回研究大会プログラム

【テーマ】 家と共同性

【日時】 2015年6月20日(土)～6月21日(日)

【会場】 札幌大学1号館4階1401教室

〒062-8520 札幌市豊平区西岡3条7丁目3-1

※札幌駅・大通駅・(豊水)すすきの駅近辺からのアクセス

(1)札幌市営地下鉄南北線「澄川駅」下車、中央バス西岡環状線(西岡3条先回り)、下西岡線(南71)、西岡線(南81)、澄川白石線(澄78)のいずれかで「札大南門」下車(バス乗車約6分)。

(2)札幌市営地下鉄南北線「南平岸駅」下車、中央バス下西岡線(南71)で「札大南門」下車(バス乗車約11分)

(バス停「札大南門」から札幌大学南門までは徒歩約3分で、少しわかりにくいです。)

(3)札幌市営地下鉄東豊線「月寒中央駅」下車、中央バス澄川白石線(澄78)、又は西岡月寒線(月82)で「札大正門前」下車(バス乗車約9分)。

(4)タクシーの場合：澄川駅～大学南門は約7分(約800円)、月寒中央駅～大学正門は約10分(約1000円)、札幌駅近辺～大学は約25分(約3000円)

※新千歳空港からバスでのアクセス

北都交通「アパホテル&リゾート<札幌>行き」で「札幌大学前」下車(乗車時間約60分、1030円、但し1時間に2本の運行です。)

中央バス・北都交通「札幌都心行き」で「地下鉄福住駅」又は「月寒中央通り10丁目」、「月寒中央駅」で下車後タクシー(乗車時間バス約60分、タクシー約10分)

【キャンパス内の順路】 下記キャンパスマップをご参照ください。正門から入ってくる場合は、中央棟に入ってください、案内に従ってください。南門から入ってくる場合は1号館入口の案内に従ってください(申しわけありませんが、1号館にはエレベーターはありません。)

【問い合わせ先】 札幌大学 林 研三研究室 Email: kenzo-ha@sapporo-u.ac.jp

【参加費】 会員1,000円、一般1,500円、学生は無料

【懇親会費】6500円（京王プラザホテル札幌 大学からホテルまでのバス代を含む）

【弁当代】1食（お茶付） 1000円

弁当を希望の方は同封のハガキにて注文してください。20日（土）は生協の一部（コンビニ）のみが短縮営業していますが、21日（日）は休業しています。正門の近辺にはカレー屋（スープカレー）やラーメン屋（徒歩10分～）等がありますが、店舗数は2、3軒です。正門の向かい側にはコンビニ（セブンイレブン）があります。

【宿泊】宿泊先については、学会HPに日本旅行北海道（株）による本研究大会用のリンクを張りましたのでご利用ください。

【託児サービス】大学内ではご用意できませんが、付近の託児施設の情報は提供させていただきますので、お問い合わせください。

【出欠等】出欠、懇親会、弁当については、同封のハガキにて6月3日（水）までにお知らせください。

◆シンポジウム「家と共同性」プログラム

6月20日（土）

10:20～10:30 会長挨拶 森 謙二（茨城キリスト教大学）

10:30～13:00 シンポジウム第1部「家社会の成立史」

司会 森本一彦（高野山大学）

挨拶 加藤彰彦（明治大学）

1. 戦国期畿内・近国の百姓と家

坂田 聡（中央大学）

2. 中世・近世の宮座と家

藪部寿樹（山形県立米沢女子短期大学）

3. 関東における家の成立過程と村

戸石七生（東京大学）

4. 近世後期における家の確立——東北農村と西南海村

平井晶子（神戸大学）

13:00～13:50 昼休憩

13:50～14:30 総会

14:30～18:15 シンポジウム第2部「近現代における家社会の展開」

司会 牧田 勳（摂南大学）

5. 明治民法「家」制度の構造とその展開——2つの「家」モデルと生活共同体

宇野文重（尚絅大学）

6. 三井の財閥化と別家

多田哲久（小山工業高等専門学校）

7. 家・宮座・共同性

——近代移行期における家墓の普及と座送り慣行

市川秀之 (滋賀県立大学)

8. 下北村落における家の共同性

——オヤグマキ・ユブシオヤ・モライッコを中心として

林 研三 (札幌大学)

中間討論——シンポジウム企画趣旨の観点から

加藤彰彦 (明治大学)

19:00～21:00 懇親会

6月21日 (日)

9:30～12:30 シンポジウム第3部「国際比較の視点から」

司会 小池 誠 (桃山学院大学)

9. 婚出女性がつなぐ「家」

——台湾漢民族社会における均分相続と「生家」の役割から

植野弘子 (東洋大学)

10. 「家 (チプ)」からみた韓国の家族・親族・ムラ

仲川裕里 (専修大学)

11. 近世インドの農村における農民と「家」

——18-19世紀のインド西部・デカン高原に注目して

小川道大 (東京大学)

12. スウェーデン農民層の農場継承と「家」

——18-20世紀における「家族農場」の成立過程

佐藤睦朗 (神奈川大学)

12:30～13:30 昼休憩

13:30～15:30 総合討論「家と共同性」

司会：森本一彦 (高野山大学)・加藤彰彦 (明治大学)

大会運営委員：林研三 (札幌大学・委員長) 加藤彰彦 (シンポジウム担当・明治大学)

上机美穂 (札幌大学) 平井晶子 (神戸大学) 森本一彦 (高野山大学)

◆シンポジウム趣旨説明

「家」は、本学会の研究大会において、中心的な主題としてしばしば取り上げられてきた。「シリーズ家族史」や「シリーズ比較家族」の一環として刊行されたものだけでも、『家と女性』『家の名・族の名・人の名』『家と家父長制』『家と教育』『家・屋敷地と霊・呪術』『家の存続戦略と婚姻』などを挙げるができる。「家」をテーマにした会員による著作も数多い。それゆえ、今回ふたたび「家」を論じるにあたっては、そうするだけの積極的な理由が必要であろう。

とくに、本企画は、新シリーズの第1巻として出版される予定なので、学術的な意義とともに、このことも踏まえる必要がある。

まず、これまで「家」はさまざまな角度から分析され、論じられてきたにもかかわらず、「家」の理解や定義は収斂されることなく、むしろ拡散してしまった。「家」の操作的定義——家名、家産、家業、永続性などの指標——については、ある程度共有されてきたものの、それを支える理論的定義の方は、未解決な課題のままである。とくに、「集団」「組織」「制度」「親族」「世帯」などの基礎概念に対する理解の甘さを問題点として指摘できる（相互に整合的な理論概念というよりも論理性の弱い感受概念として使われるのが一般的である）。「家」の定義をめぐる錯綜とした状況は、基礎的諸概念の理論的妥当性と整合性の欠如によって生み出されたといえるかもしれない。それゆえ、日本の家研究は、過去の論争をひとまず学説史上の問題として区別したうえで、今一度、各時代、各地方の実証的知見に立ち帰って、それらを総合しつつ、一から帰納的に理論構築していく必要があるだろう。

また、日本における庶民の「家」の成立時期についても、中世から近世後期まで幅が広い。これには、史料／資料の制約の問題が深く関わっているように思われる。「家」の研究者は、時代的、地理的、階層的に限定された史料／資料を利用し、それに没頭する傾向が強い。その結果、自らの直接の研究対象には詳細な知識を得ることができるが、他の時代、他の地域、他の階層については手薄にならざるを得ない。自らのフィールドに立脚して眺める全体像はどうしてもデフォルメされがちである。「家」に関わる諸現象を理解するためには、時間、空間、階層の3次元を方法論的に自覚する必要があるが、このような鳥瞰的な視野を獲得するのは必ずしも容易ではない。

とはいえ、そうした鳥瞰図を描くために必要な全国レベルの資料がないわけではない。たとえば、半世紀前に日本文化の地域類型研究会（東大文化人類学研究室）が行った全国レベルの村落サーベイ調査（いわゆる「日本文化の地域性調査」）のデータを用いて統計地図を描くと、明治民法施行前の「家」と村落構造に関する諸要素（約100変数）の全国的分布状況を知ることができる。こうした分布地図を基本枠組として用いれば、「家」と「家社会」成立の歴史を地理的および階層的な拡散過程として整理・総合することも不可能ではない。本シンポジウムでは、日本の「家」と「家社会」の歴史を中心軸に据えつつ、国際比較の視点をも組み込んで、その全体像の俯瞰を試みたい。

第1部では、中世・近世における庶民の「家」および「家社会」の成立過程を扱い、第2部では、近代・現代における「家社会」の展開の諸相を、国民国家と「家」制度、企業社会と「家」の原理、村落社会のなかの「家」と共同性などを主題とした報告によって描き出す。

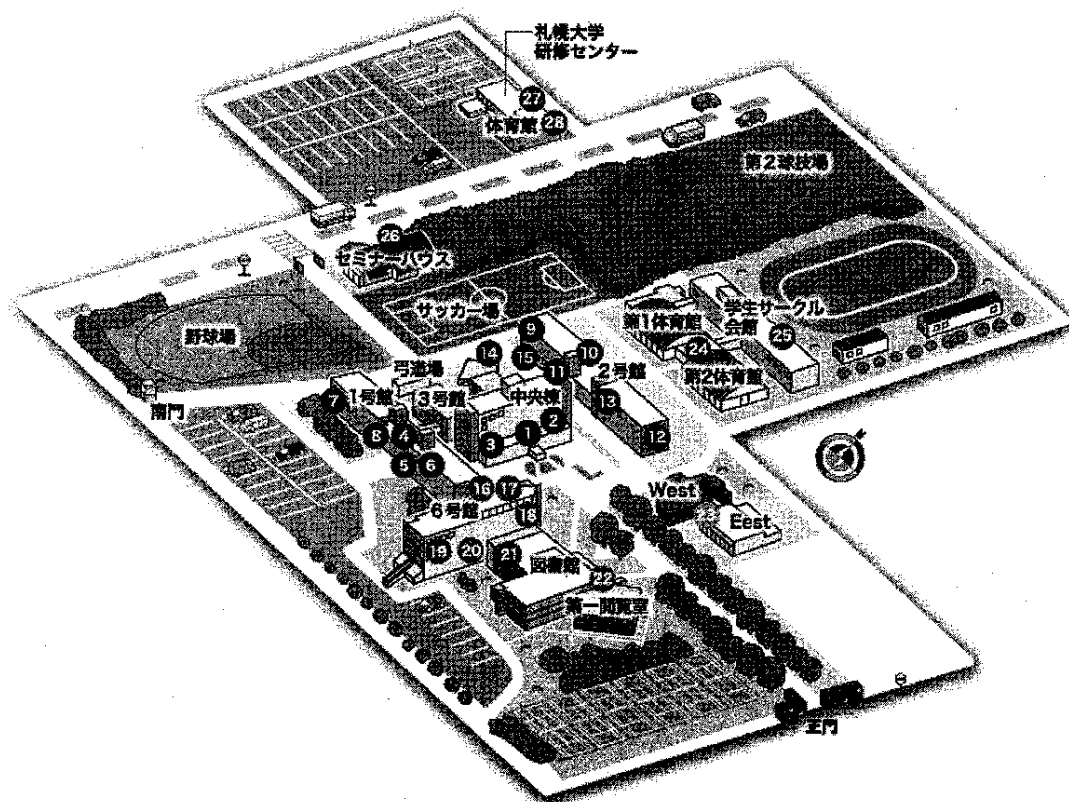
この構成案のもとにある作業仮説は、畿内・近国で成立した庶民の「家」が、時間経過とともに地理的にあるいは階層的に全国へと拡散していき、その結果、近世末において、「家を単位とした社会」と呼びうるような共通の地盤が、大きな多様性をともないながらも、確立されて近代が準備された、というものである（前述した分布地図は、その歴史的ならびに地理的な帰結である）。第2部の後に中間討論を設けて、こうした見通しの妥当性を検討して暫定的な総括を行い、第3部と総合討論への橋渡しをしたい。

第3部では、国際比較の視点から、社会組織としての日本の「家」の特性について考察する。具体的には、台湾、韓国、インド、スウェーデンの家族や親族組織あるいは村落組織の構成原理と日本の「家」や村のそれとは、どのように異なるか、共通性と差異を描き出せるような報告を期待している。

なお、タイトルの「共同性」は、「家」の内部の共同性と外部の共同性の両方を指示する包括的な概念として用いている。後者には、同族や村落組織、講や仲間関係など、「家」を取り巻くさまざまな共同性が含まれる。どのような共同性が論じられるかは、対象とする時代、地域、階層によって重点が異なると考えられる。また、各報告のタイトルには「」を付した「家」と付さない家が混在している。よく用いられるイエも含め、こうした表記の違いの背景には、各学問分野の習慣や各論者の家概念の違いがあるように思われる。総合討論では、家概念および関連諸概念の交通整理を試み、全体として整合性のとれる理論的定義を探りたい。

前述したように、今回のシンポジウムは、新シリーズの第1巻として出版されることが予定されている。本学会自体の「少子高齢化」問題と将来への存続可能性を考慮すれば、読者の中核として想定されるのは「家」に関する基本的知識を欠いている若い世代の家族研究者であろう。こうした若手研究者や大学院生に、過去の家族を知ることの重要性を伝えて家族史研究へと誘うことも、今回「家」を主題として取り上げることの意義の一つである。

文責 加藤彰彦 (明治大学)



【理事会議事録】（2014年11月15日（土）：於：愛媛大学）

理事会出席者：森会長、八木副会長、加藤理事、小島理事、床谷理事、森本理事、米村理事、
大野：他、委任状出席 11名 理事会成立

1. 会長挨拶

森会長より、理事会開会の挨拶が行なわれた。

2. 会計報告…森会長（高木前会長が説明者であるが病気のため、前副会長により説明）

2013年の会計報告が、前回理事会（於、千葉大学）において、確定していなかったため、会計報告が行われた。今回の会計の問題点として、実質的に支出した時期と帳簿上の支出時期が異なるため、混乱を招いた。以降、郵貯口座からの振込みを基準にして出納を明確化する方針が確認された。今回の決算報告書は次の会報に掲載する。

今回、決算資料を精査したところ、前回理事会に提出した資料を大幅に訂正せざるを得なくなった。その結果、本来であれば、再監査を行なうべきであるが、再監査をする事が、問題となる可能性を含むため、今回は再監査を行わず、次回から、厳密な監査をお願いすることとした。

（当日出席の理事のみでの確認事項）

3. 新入会員の承認…八木副会長（庶務担当）

上机美穂（札幌大学）、近兼路子（慶応義塾大学大学院）、本多真隆（慶応義塾大学大学院）、新木慧一（佛教大学大学院）の新入会が承認された。なお、平原園子（佛教大学）は申込金の振込みが確認され次第との留保条件付きで新入会が承認された。

4. 企画部門…森本理事（企画副委員長）、加藤理事（企画担当）**a) 企画部門からの要望（森本理事）**

企画を行なう際に会報などをHP上に掲載してほしいとの要望があった。

→これまでの会報をPDF化したものをHP委員会（大野）に送れば、大野からHP上に反映させる旨を伝えた。

企画委員長へのHP更新のためのID、パスワードを通知してほしいとの旨の要望が伝えられた。

→HP委員会から了承したとの回答があった。

b) 2015年秋季大会の企画について（森本理事）

2015年の秋季大会を高野山大学で11月14日に行なう旨が決定した。同大会は森本理事と小池理事が実行委員となることが報告された。大会内容として、午前中に自由報告を入れ、午後にミニシンポジウムを企画する案が提示され了承された。また、ミニシンポジウムとして、「高野山の人口維持システム」と題する企画が提示され、報告者と各テーマが提示された。理

事会では企画者である森本理事に同大会の運営を一任することを決定した。なお、高野山大学での大会において、宿泊をする場合、宿泊施設として宿坊が想定され、食事時間等の制限があり、午後の遅い時間まで会を行なうことが困難であるため、理事会を大会の翌日に開催することが決定した。なお、宿泊については、会としての取りまとめは行わず、案内を出すにとどめることとした。

c) 第57回研究大会(2015年春)の企画について(加藤理事)

2015年に開催される第57回研究大会は、6月20日から21日にかけて、札幌大学で林理事を運営委員長として、「家と共同性」というテーマでのシンポジウムが開催されることが確認された。なお、これまでの大会では参加費を1000円程度にしていたが、大会運営のため、従来よりも高くなる可能性があるかと林理事から問い合わせがあった。

→参加費は特に規定はなく、これまでも3000円程度の参加費を徴収した会や無料とした会があった。参加費を徴収した場合、領収書を確実に公布する必要があるだけであるとのこと確認された。

本大会のシンポジウムは本学会の新シリーズ(日本評論社)の第1巻として出版されていることが予定されていることを念頭に置いた構成とする案が提示された。シンポジウムは3部構成を取り、第1部(初日、午前)では「家社会の成立史」として日本中近世史を中心とした報告を行なう予定である。個別の内容と報告者案については、中世戦国期の近畿(坂田聡氏と交渉予定)、近世前期の近畿(菌部寿樹氏もしくは尾脇秀和氏と交渉予定)、近世前期の関東(戸石七生氏と交渉予定)、近世後期の東北と西南(平井晶子氏もしくは中島満大氏と交渉予定)。

第2部(初日、午後)では「近現代における家社会の展開」として、近現代史及び社会学や民俗学などを中心とした報告を行なう予定である。個別の内容と報告者案については、「家制度(明治民法)」の成立とその内容(養輪明子氏もしくは山本紀世子氏と交渉予定)、家の原理と企業社会(多田哲久氏もしくは米村千代氏と交渉予定)、家・宮座・共同性(森本一彦氏もしくは市川秀之氏と交渉)、家/個と共同性の村落構造(林研三氏もしくは大野啓)。

初日には第1部と第2部を通して加藤彰彦氏の司会による中間討論を行う予定。

第3部(二日目、午前)には、「国際比較の視点から」として、アジア、ヨーロッパの家的な社会を中心とする報告を予定している。なお、第3部では韓国、漢族、インドに加え、欧州の中でもドイツ、スウェーデン、ロシアなどを扱った研究者の報告を扱うべきだとの議論があった。スウェーデンの報告として、佐藤睦朗氏にお願いすべきとの声も上がった。現時点での報告内容と報告者案は以下の通り。韓国の家族/親族/村落社会との比較(仲川祐里氏と交渉予定)、漢族の家族/親族/村落社会との比較(植野弘子氏もしくは、植野氏からの紹介者と交渉予定)、インドの家族/親族/村落社会との比較(小川道大氏と交渉予定)

二日目の午後には森本一彦氏と加藤彰彦氏の司会による総合討論を予定している。

第57回大会のシンポジウムの報告者等についての基本路線が承認され、以降は、企画委員会で報告者との交渉等を行なうことが決定した。

なお、シンポジウムの準備会を3月に行なう予定であり、報告要旨を4月末までに準備する予定である旨が確認された。

d) 第58回研究大会(2016年春)について(森本理事)

第58回研究大会は平井・床谷両理事を運営委員として開催する旨が報告された。会場としては、近畿大学、京都産業大学と交渉を行なっている。

5.編集(米村編集委員長)

『比較家族史研究』の編集状況が報告され、3月から4月に発行できるよう努力していると報告があった。

6.その他(八木庶務担当委員長)

秋季大会で配布された発表要旨をHP上に掲載したいとの要望が出された。

→高橋実行委員長から発表者に承諾を得てもらった上で、データをHP委員に送れば、HP上に掲載することとなった。

5月の連休明けまでに第57回研究大会の発表要旨を会員に送付したいので、4月中に各シンポジストからA4版1枚の要旨を提出するようにして欲しいとの要望が出された。

→3月に準備会を行ない、それをもとに報告要旨の作成をすると加藤理事が回答

【『新修・事典家族』編集委員会からの報告】

予定より遅れています『新修・事典家族』の編集作業は、いよいよ大詰めを迎えています。2015年5月時点で約95%の原稿が出そろい、順次校正が行われています。現時点での予想では、遅くとも今秋には刊行できる見通しです。早くに原稿をいただいた会員には遅れましたこととお詫びいたしますとともに、今後とも本事典の編集・刊行にご理解とご協力を切にお願いいたします。

(『新修・事典家族』編集委員会)

★次回の秋季研究大会について★

秋季研究大会を2015年11月14日(土)に高野山大学において開催します。自由報告とミニ・シンポジウム「高野山における人口維持システム(仮)」を予定しています。ミニ・シンポジウムでは、明治5年まで女人禁制が実施され、出生率0であった高野山が如何に維持されていたのかを考えます。山口文章氏(高野山真言宗山林部長・総長公室長)は1200年を迎えた高野山について、芦田裕介氏(日本学術振興会)は高野山周辺の空き家の現状について、島津良子氏(奈良女子大学)は近代における女人禁制の段階的解除について、森本一彦(高野山大学)は前近代における僧侶の移動についての報告を予定しています。皆さん万障繰り合わせの上ご参加ください。

(文責:森本一彦)